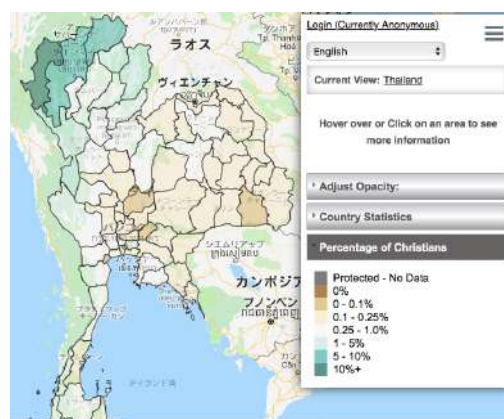


研究プロジェクト名称：タイの信教の自由に影響を与えた宣教師の手紙の分析
プロジェクト代表者氏名・所属： 研究代表者：森島豊・総合文化政策学部

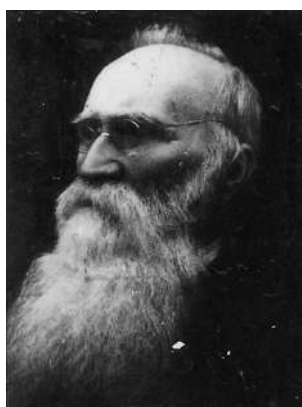
タイの信教の自由に影響を与えた宣教師の手紙の分析

本研究は、タイにおけるキリスト教の影響を「信教の自由」に焦点を当てて調査したものです。特に、信教の自由から始まる人権の法制化にキリスト教がどのように関わったのかを研究しており、日本が欧米から受けた同様の現象がタイでも起こっていることの実証を試みています。

仏教国であるタイはキリスト教人口が日本同様とても少ない。図の地図を見るとわかるが¹、現在バンコクで1パーセント、その他の地域では0.1パーセント以下です。ところが、タイ北部においては10パーセントを超えています。この数値は日本のキリスト教人口を超えています。なぜタイ北部にキリスト教人口が多いのか。その要因の一つに信教の自由の保障を迫った宣教師の働きを探るのが本研究の目的です。



タイ北部においてキリスト教人口の割合を多く占めているのは山岳地帯に点在する山村共同体です。そこでは共同体全体がキリスト教信仰で成立しています。村の中心には教会が建てられ、様々な生活文化行事がキリスト教の儀式で行われています。近年、海外宣教団体が彼らの存在を知り、教会建築や道路等のインフラ整備を応援しています。



その関係の中で、山岳民族とチャンマイ等のタイ人キリスト教会はルーツも歴史も異なることが分かってきました。山岳地帯の人々はいわゆるタイ人ではありません。他の諸民族で中国やラオス、ビルマから渡ってきた人々です。ある村の長に尋ねると、彼らの祖先が中国から渡ってきたと言いました。その理由を尋ねると、中国でキリスト教信仰が弾圧されたので、村ごと逃げてきたということでした。残念ながら、これらに歴史的文

¹<https://thaichurches.org/harvest/mapping/CP/map.html?displaylang=EN&lang=sec> (2025 年 3 月 16 日閲覧)

献資料がなく、その多くが口述歴史に拠っており、その歴史の跡づけが今後の課題となっています。

宣教師ダニエル・マックギルバリー

一方、チェンマイ等のタイ北部にキリスト教人口が多い要因の一つは、タイ北部宣教の開拓者ダニエル・マックギルバリー（写真）の功績が大きいと考えられています。マックギルバリーは一八二八年に生まれ、メソヂストの日曜学校で教育を受け、メソヂストの信仰復興運動の集会にも参加していましたが、後に長老派教会に属するようになりました。一八五三年プリンストン神学校で学び、組織神学三巻本を著したチャールズ・ホッジからも影響を受けています²。「キリストがまだ説教されていない場所」³へ行くという目的を持っていた彼は、ある時 S・R・ハウス（Samuel Reynolds House）のシャム・ミッションの報告を聞いて、タイへの宣教に向かう決意が与えられました。

マックギルバリーは一八五八年六月二十日バンコクに到着した。彼は最初から王室や政府関係者と接触する機会を得た。一つはラーマ四世との謁見である。これはアメリカ領事館の好意でアメリカ大統領ジェームズ・ブキャナンの親書を手渡す役目を与えられたのである。また一八五九年バンコク西南に位置するペッチャブリーに行き、後にラーマ五世の治世で外務大臣になる政治家と会食をした。彼はブラッドリー夫人のもとで英語を学び、イギリスに外交使節団として派遣された経験を持っていた。そこで自分の息子に英語を学ばせたく、マックギルバリーにペッチャブリーへ来るよう求めた。その際、彼は「もし、私の息子に英語を教えてくれるのならば、キリスト教を好きなだけ教えても良い」⁴とキリスト教宣教の許可を与えたのである。一八六一年六月マックギルバリーはペッチャブリーに向かい、そこでタイ北部のラオ人が住む村を訪れ、北部への宣教の思いを募らせた。

タイ北部伝道の可能性の道は、一八六六年十月にチェンマイを治めていたカウィロロット王(Chao Kawilorot)がバンコクを訪問したときに訪れました。マックギルバリーはチェンマイでのキリスト教宣教の許可を得るために、政治的な手段を利用して交渉しま

² Cf. Daniel McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao: An Autobiography* (New York ; Chicago [etc.]: Fleming H. Revell Company, 1912) 36.

³ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 37.

⁴ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 49.

した。アメリカ領事館の協力を得て、先の外務大臣となったペッチャブリーの政治家を通して、タイ国王にチェンマイでの伝道所開設の許可を求める書簡を送ったのです。国王からの返答は、チェンマイの王がバンコクにいますので、公式会見する場を設けるので直接訴えなさい、という提案でした。会見の場には、国王の秘書、アメリカ領事、ブラッドリー、マックギルバリーそして他の宣教師が同席しました。チェンマイ王は宣教師たちの要望に応え、「キリスト教信仰を教え、学校を建て、病人を癒す」⁵というマックギルバリーの目的を了解しました。

チェンマイにおけるキリスト教弾圧

チェンマイにおける急速なキリスト教の伝播はカウイロロット王に危機意識を抱かせました。何故ならば、キリスト教はタイ北部に根付く古い社会構造と秩序を壊す恐れがあったからです。タイ北部の王の統治権力は伝統的な社会の宗教と切り離しがたく結びついていました。しかし、伝統文化や習慣を通して維持されていたタイ北部の支配構造は、「近代化と中央集権化（バンコクの力）」という波に脅かされていました。キリスト教は近代化を進めるバンコク王朝と親しい関係を持っていました。そのキリスト教信仰の広がりにはタイ北部の土地に根付いた社会構造を壊す危険があったのです。

カウイロロットは当初バンコクにおいてキリスト教回心者がほとんど現れなかったもので、宣教師たちの働きを楽観的に受け止め、政治的な対応として受け入れていました。けれども、社会的地位のある人々への急速な影響を深刻に受け止め、政治的・宗教的指導者たちはキリスト教会に弾圧を加えていったのです。これに対してマックギルバリーたちはキリスト教迫害に抗うため、近代化と中央集権化を進めたいバンコク王朝（ラッタナコーシン王朝）との親しい関係を利用して、チェンマイ国王と政治的駆け引きを行うのです。

弾圧の発端は一八六九年一月末、最初の回心者ナン・インタ(Nan Inta)が礼拝へ参加するため、雇い主に日曜日の労働を断ったことから始まります。当時、徭役(ようえき)労働の仕組みは統治者の権力の基盤でしたが、その命令に背く行動は社会秩序そのものを揺るがすことでした。特に、ナン・インタの信仰から生まれた行動は、王に勝るものへの忠誠を意味していたので、カウイロロットにとっては見逃すことのできないこ

⁵ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 69.

とでした。彼はキリスト教信仰に潜在する王権に抗う行動に危機意識を持ったのです。

最初の殉教者は一八六九年九月十四日に殺されたナン・チャイとノイ・スンヤでした（絵画参照）。彼らは王の命令を拒んだかどで逮捕されましたが、尋問された内容は「外国の宗教に入信したのか」ということでした。彼らはそれに「はい」と答えました。ナン・チャイの妻が捕らえられた事態を宣教師に報告しようとしたとき、村長の密使が「宣教師に知らせれば彼女の命に関わる」と脅し、彼女を監禁されている場所に連行しました。ナン・チャイが妻へ最後に伝えた言葉は「宣教師たちに伝えてくれ。我々はキリスト者であるために殉教する」という言葉でした。



九月二十六日殉教者の近隣の者が、彼らが殺されたことを宣教師に密かに伝えた。宣教師たちの身にも危険が迫り、マックギルバリーは義父でバンコクで活躍していた宣教師ブラッドリーに宛てて「我々は非常に危険な状況にあります。もし我々から何の便りもこなければ、我々は天国にいると思ってください」と手紙を綴った。彼らの送った手紙はバンコクに届き、宣教団体はすぐにシャム政府に対応を迫った。

これにより、十一月二八日シャム政府の長官は大きな隊列を組んで二人の宣教師を伴い王印(Golden Seal)が付された書簡をカウイロロットへ届けにやってきました。公式会見で読まれた書簡の内容は、「宣教師がチェンマイに滞在したいのならばそれを許可し、去りたいのならばそのようにし、何れにしてもそれを促進するのであつて妨害してはならない」という内容のものでした。書簡には殉教者への言及がなかったので、マックギルバリーが殺害された二人のキリスト者について問うと、カウイロロットは「彼らは政府の仕事を怠ったために死刑になったけれども、それはあなたには関係のないことだ」と述べ、それで会見は終わろうとしていた。けれどもマックギルバリーは王が真実を語っていないことを論理的に説明しながら、公式会見の場で彼を糾弾した。そこで王は激怒し、次のように語った。

そうだ。彼らがキリスト教を信奉しているから殺したのだ。同じように信じるすべての者を殺し続けるだろう。この土地の宗教から離れることは王に逆らうことなのだ。だからそのように取り扱う。もし宣教師たちが病人の治療を行うのならば、治療は続けられるだろう。けれども、キリスト者を生み出してはならない。つまり、キリスト教信仰を教えてはならない。もしそのようにするのならば、宣教師をこの

土地から追放する。⁶

宣教師たちはチェンマイでの宣教がもはや不可能であることを感じ撤退することを決めるが、マックギルバリーは翌日再びカウィロロット王に謁見し、王がバンコクから帰国するまでの間チェンマイに滞在する約束を取り付けました。王より先にバンコクに戻った他の宣教師たちは、アメリカ領事館にこの事件を報告しました。領事館は全力でシャム政府に働きかけ、カウィロロットが宣教師たちに危害を加えないことを保障するよう圧力をかけました。さらに、「もしチェンマイにいるアメリカ人を守ることができなければ、アメリカ政府との間に深刻な障害がもたらされる」ことを警告しました。シャム政府は、カウィロロットの死期が近いことを悟り、彼に圧力をかけることを避け、宣教師たちと親しい次の王について協議するという政治的対応をしました。実際、カウィロロットはチェンマイに戻る途上で病死したため、この件についてこれ以上悪い方向へ進展することはありませんでした。

『宗教寛容令』の発布

タイ北部でのキリスト教宣教は、村落社会に起源を持つ精霊信仰や祖先の霊を崇拝する宗教、そしてその宗教と結びついた社会慣習と衝突することがありました。たとえば、マックギルバリーたちはキリスト教宣教によりその土地の諸霊を怒らせ米の不作をもたらしたと訴えられました⁷。実際は、米の不作は宣教師たちが来る前から始まっており、チェンマイの他の地域にも広がっていたのですが、そのような攻撃を受けることがあったのです。

文化的慣習から来る衝突は、北部タイにおける最初のキリスト教結婚式においても生じました。そしてこの衝突が思わぬ方向に展開し、最終的にタイで最初の信教の自由を保障する『宗教寛容令』（写真参照）が国王の勅書の形で発布されるに至ったのです。

発端は一八七八年のナン・インタの長女の結婚式でした。新郎・新婦は共にキリスト者であり、北部タイにおける最初のキリスト教信者の結婚式となりました。この結婚式には王



⁶ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 123.

⁷ Cf. McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 103-104.

室関係のゲストを数人招いていましたが、その一人であるナン・インタの君主との間に深刻な問題が生じました。彼は伝統的な習わしである家長への「精霊料(spirit fee)」を捧げなければ結婚を許可しないと主張したのです⁸。

その習わしはもともと精霊への供え物として納められていましたが、当時はその行為により結婚を合法として認めていました。けれども、それは成文化されていない社会の仕来りであり、極めて宗教的要素の強い行為であったため、キリスト教信者の家族はそれを偶像礼拝と受け止めました。しかし、そのお金は君主に属していたため、大きな問題に発展したのです。

宣教師たちはシャムの政府長官に訴えたが、彼はその問題がキリスト教に対して激しく反対しているウパラット王(Chao Uparat)に帰属すると述べました。問題となっているナン・インタの君主はウパラット王の兄弟であったので、この問題は解決できないと思われました。しかし、マックギルバリーはこの問題をバンコク王ラーマ五世に訴えました。ラーマ五世はこれをチェンマイ代表の長官ファ・テプ・ウォラチュン(Phya Tep Worachun)に戻し、彼にこの件に関して勅令を出す権限を与えました。宣教師たちと親しかった長官は、この勅令をキリスト教信者の結婚に限定するのではなく、「一般的な宗教的寛容の主張」⁹のために作成することを提案しました。起草された文章はアメリカ領事館のシッケルズ大佐(D. B. Sickels)を通して国王に届けられました。そして一八七八年十月八日『宗教寛容令』が發布されたのです。

寛容令には信仰する宗教が理由で市民生活に支障をきたすことが起こらないことが宣言されていました。それは政教分離を意味しているのではなく、信教の自由を意味して、以下のように述べられていました。

いかなる宗教においても、それを信じることが真理であり正しいと理解した後に、それを信じることを望むならば、誰であれ、どんな制約も受けることなく信じることが許される」という文言にあるように、また「この宣言は……宗教的信仰と実践に関する全てのことについて、自らの良心の指示に従うことが許されていることを保障する。¹⁰

ここで宣言されている『宗教寛容令』は「いかなる宗教」とありますが、特にキリスト

⁸ Cf. McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 207.

⁹ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 210.

¹⁰ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 216.

教を名指しして、「より具体的には、誰であれキリスト教信仰を信じたいと望むならば、彼らは自らの選択に従って自由に信奉することが許されている」¹¹と、キリスト教を保護する目的が明確に出ていました。また、「アメリカ人が必要に応じてそのような人々〔タイ人キリスト者〕を雇用することに対しても妨害をしてはならない。もしそのようなことになれば、二国間の条約違反となるだろう」¹²とあるように、アメリカ人、特に宣教師の安全保障が示されていました。

今後の課題と Sickels 文書

『宗教寛容令』によりタイ北部では比較的自由に宣教が可能となりました。事実、チェンマイには多くのキリスト教会が存在し、現在もチェンマイ第一教会には礼拝堂からあふれるほどの人々が礼拝に参加しています。また、パヤップ大学には神学部があり、タイで最も多いキリスト教蔵書と資料を保管しています。

しかし、『宗教寛容令』について、問いもたくさんあります。実際に、マックギルバリーを含めた多くの者たちが『宗教寛容令』をタイ教会史における大きな成果であると評価するのに対して、これを懐疑的に捉える研究者もいます。タイ北部のキリスト教史に関して優れた研究をしたスワンソンは、この勅令が保障する信教の自由を「根本的な誤解」であるとし、「神話」とまで言及しています¹³。彼がそのように判断する理由は大きく二つあります。一つは、「国王が勅令を発布したのではなく、発布する許可を与えた」ということです。二つ目は、この勅令が出された後も、北部タイで迫害が続いたことです。スワンソンは宣教師ウィルソンが報告している二つの迫害を紹介して、「勅令それ自体が北部におけるキリスト教を信仰する自由を現実的に保障しているということとは疑わしい」¹⁴と述べています。

もう一つの問いは、この文書の印が王印ではない可能性があることです。スワンソンが述べるように、これはラーマ5世が部下に作成を許可した行政文書であり、その目的はアメリカ人の安全保障ではないかということです。そのように考えると、この文書が発布された後も地元のキリスト教徒に弾圧が加えられており、信教の自由が認められて

¹¹ McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 216.

¹² McGilvary, *A Half Century Among the Siamese and the Lao*, 216.

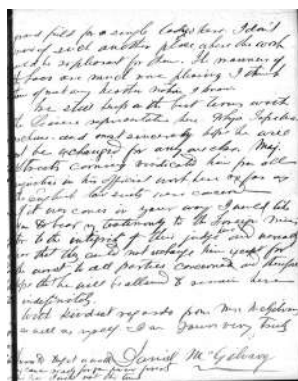
¹³ Swanson, *Khrischak Muang Nua*, 28.

¹⁴ Swanson, *Khrischak Muang Nua*, 28.

いなかった実態に納得がいくからです。

執筆者は、その事実を解明する驚くべき発見をしました。この問題に対応したアメリカ領事館のD.B. Sickelsの資料がアメリカ公文書館に保管されており、当時の関連資料を発見したのです(写真参照)¹⁵。この資料の中にはマックギルバリーや他の宣教師からの手紙が保管されており、当時のやり取りや本国への報告に関する資料が保存さ

れています。これらの文書を解読分析することで、『宗教寛容令』の成立過程とその本質を解明することができます。この点は、今後の課題として継続して研究してまいります。



¹⁵ Feb. 23, 1877-Feb. 23, 1880. Feb. 23, 1877-Feb. 23, 1880. MS Despatches from U.S. Consuls in Bangkok, Siam, 1856-1906 Volume 6. National Archives (United States). *Nineteenth Century Collections Online*, <http://tinyurl.gale.com/tinyurl/CT7RZ5>. Accessed March 15, 2025. Gale 文書番号: GALE/ADLHFQ964751231.